風葉和歌集

風葉和歌集巻第３
夏

六条院御歌

よるをしる蛍をみてもかなしきは
　時ぞともなき思ひなりけり

玉かづらの尚侍のもとにたちよりて侍りけるに、六条院几帳のかたびらに蛍をつつみ置き給ひてうちかけたまへばにはかにひかるを、ほどなくまぎらはしかくしければ
　ほたるの兵部卿のみこ

なくこゑのきこえぬ虫の思ひだに
　人のけつには消ゆるものかは

かへし　尚侍のかみ

声はせで身をのみこがす蛍こそ
　いふにもまさる思ひなるらめ

ものおもほしけるころ、よもすがらもえあかす蛍のひかりもあけゆけばきえぬるを、うらやましく御覧せられて

ながれてはやきあすか川の院御歌

身をこがすたぐひにみゆる夏虫も

あくれば消ゆる思ひなりけり

「国歌大観」より